

Medical Salon NANA O

メデイカルサロン

— な な お —

第
79号



新型コロナワクチン集団接種シミュレーション 令和3年4月17日 矢田郷地区コミュニティセンター

目次

表紙	p.1
挨拶	p.2
新しい仲間①～④	p.3～6
高齢社会と地域連携についての一考	p.7
お元気ですか?	p.8
新しい検査—PET-CT検査—	p.9
「ダ・ヴィンチ」～手術支援ロボット～ 導入後の今・これから	p.10
これだけは言わせて Society 5.0における医師会とwith コロナの時代	p.11
三師会ゴルフコンペ	p.12
ななお紫蘭の会 活動報告/ あじさい会 活動報告	p.13
七尾看護専門学校だより	p.14
医師会の窓	p.15
副会長のコーナー／短信／編集後記	p.16

七尾市・中能登町でも、新型コロナワクチンの接種が着々と進行しています。特設会場での集団接種に関して、七尾市医師会は七尾市・中能登町の担当者と何度も協議を重ねて準備を進めてまいりました。表紙の写真は4月17日に行った、集団接種会場でのシミュレーションの様です。茶谷市長をはじめボランティアの方々にも「模擬市民」として参加していただき、当日の流れを詳細に確認いたしました。一日も早く日常を取り戻せるよう、七尾市医師会としても全面的に協力したいと思います。

写真・文 佐原博之（七尾市医師会副会長）



安心して過ごせる日常を取り戻すために

七尾市医師会 会長 奥村義治



私たちの生活を一変させた新型コロナウイルス感染症ですが、この流行に伴う史上初の緊急事態宣言が発令されてから1年余り経ちます。しかし日本では感染が落ち着いたとは言い難く、依然として予断を許さない状況が続いています。

この感染症が流行し始めた頃、感染症の専門家が述べていた予測を振り返りますと、おおよその事柄が現実のものとなっています。例えば、(1)第1波の後には第2波、第3波と流行が繰り返され、これらは第1波より大きな波となり得ること、(2)流行が繰り返されると変異ウイルスが出現し、これらは従来型より感染力が強まる可能性や死亡率を高める可能性があること、(3)治療法が確立するまで、あるいはワクチンによる集団免疫が獲得されるまでは防御手段は密集の回避と移動の制限しかないこと、等々。

そしてその感染防御に対して大きな救いの手となり得るワクチン接種が、いよいよ今年の2月中旬（当地域は3月下旬）から医療従事者を皮切りに開始されました。しかし当初のワクチン供給量は極端に少なく、医療従事者数が予測より多かったことに加え、供給時期に関する情報が曖昧であったことから接種は遅々として進まず、七尾市・中能登町のすべての医療従事者が2回目の接種を終えたのは5月22日となりました。当初の予定では4月15日に接種を終える予定でしたから、1ヶ月余遅れたこととなります。医療従事者数に関しては当医師会では早い段階で綿密に計算の上、県に報告していましたが、当初は供給されるワクチン不足は地域内では如何ともし難い状況でした。最終的には一部医療機関等の施設が他地域（能登北部）の基本型接種施設と結びつく形で無事接種できることとなりました。何度も接種予定を変更して頂き、接種を受ける各施設へその都度連絡していただきました基本型・連携型接種施設の担当者の皆様には大変な労力と心労をおかけいたしました。紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

さて5月から65歳以上高齢者への優先接種が開始されましたが、先の医療従事者との高齢者への接種体制を確立するために、県医師会や郡市医師会内では幾度となく会議を重ねました。ワクチンに関わる会議の回数は1月～4月だけでも、郡市医師会長協議会3回、定時総務会および役員会が計8回、臨時総務会2回、会員の意見交換会3回に上ります。当医師会内での会議には必要に応じて市町担当者、薬卸業者、ワクチンの予約や会場での誘導・案内を担当する旅行会社の方々にも出席して頂き、情報の共有を図りました。

高齢者の優先接種のフェーズでは、かかりつけ医が慢性疾患を有する患者さんに自院で個別に接種することを基本と考え、かかりつけ医を持たない方へは特設、あるいは一部医療機関での集団接種会場を設けることとしました。本会員の皆様には自院で

の接種体制の確保や集団接種会場への医師、看護師の出務をお願いし、多くの医療機関にご協力いただけることとなりまして本当に有難く思っています。

また 特設会場での集団接種では看護師、薬剤師のお力添えが必須と考え、薬剤師会、看護協会に出務をお願いしましたところ、快諾を頂きました。この2つの専門集団に出務を依頼するのは市町ですが、医師会はコーディネート役として各団体の代表者にお会いして出務会場での役割分担について調整を行いました。薬剤師会にはワクチンの希釈、シリンジへの充填をお願いしましたが、調剤薬局勤務の若い薬剤師は注射剤配合の経験が乏しく不安も強いとの事から研修会を開催。経験のある病院薬剤師・看護師が指導役となって希釈・充填のトレーニングを行って頂きました。看護協会では、総合病院でファイザー製ワクチンを扱った経験のある総合病院看護師を各会場へ派遣できるようご配慮頂き、薬剤師への指導や補佐をする役割も担って頂けることとなりました。薬剤師会、看護協会の関係各位には心から感謝申し上げます。

特設会場での接種と並行して、5月下旬からは各医療機関での個別接種、集団接種が始まりますが、接種を行う施設ではワクチンの注文、配送されたワクチンの管理、接種後の記録など新たな業務が増えることとなります。とりわけワクチンの接種実績を報告するワクチン接種円滑化システム（V-SYS）とワクチン接種記録システム（VRS）は別々の端末を用いることとなり、現場では業務量が増加、煩雑化します。これらシステムが一元化できなかったのはそれぞれの省庁の思い付きで始まったのでは？、と勘ぐりたくります。「発熱等診療・検査医療機関」ではこれまでも発熱患者を診察した際や新型コロナ感染症の検査を行った際に報告する医療機関等情報支援システム（G-MIS）、更に新型コロナ感染症と診断した際に患者情報を登録する新型コロナウイルス感染者等情報把握・管理支援システム（HER-SYS）がそれぞれ別個に立ち上げられており、医療の現場では取り扱うシステムが増える一方でIT化を掲げる国の施策とはかけ離れていく感じがしています。

いろいろと課題も多い新型コロナウイルス感染症に関わるシステムではありますが、私共地域の医療者に課された任務は通常の診療、健診などを行いながら、可能な限り早く地域の皆様にワクチン接種の機会を設けることと考えています。今後、上述した各システムの改変や統一化、取り扱いが容易な国産ワクチンの流通など様々な望みはありますが、何よりも期待しているのは方向性を見誤らない、また揺るぎのない国や県の手綱さばきです。



令和2年4月より医療法人松原会七尾松原病院の院長に就任いたしました、飛騨賢一と申します。七尾市医師会に加入をさせていただきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、医師会の活動にはほぼ参加できていません。お詫びを申し上げますとともに、この機会に自己紹介をさせていただきます。

出身は、富山県南砺市（旧井波町）で、高岡高校を卒業後、名古屋に行きました。大学では、まじめに学問にいそしむことはなく、バイトと、スキー部の活動に精を出していました。

初期研修を三重県の市立四日市病院で行い、医員として整形外科、麻酔科に従事しました。なかなか、一つのところに長続きすることが難しく、いろいろと悩んでおりました。

平成20年3月に七尾松原病院に勤務することとなり、平成21年6月からの松原病院での勤務を経て、平成22年9月から再び七尾松原病院に勤めております。



この文章を作成するにあたり、改めて自分の経歴を振り返りましたが、出身地以外では、この七尾での生活が一番長くなったことになり、感慨深いものがあります。最近、方言まる出しで診察したり、職場でいたりすることが多いのですが、南砺市の方言と七尾の方言は共通するところが多くあり、違和感があることが少ないです。ただ、わかる人にはわかるようで、しばしば富山出身だと当てられています。

さて、当院は昭和33年4月に100床の病院として開設され、昭和58年7月には157床まで増床しました。近年の国の方針である「入院から地域へ」の流れもあり、また、能登地域の人口減少や、精神疾患の疾患像や患者数の変化があり、徐々に病床を減らしていきました。平成30年7月から急性期治療病棟48床、精神療養病棟60床の計108床（22床休床）の運用をしております。急性期治療病棟の責任者として運用開始から従事しておりますが、新規入院患者の獲得、そして入院患者の退院先の確保に苦勞することが多いです。能登地域の医療機関や施設の方々には助けをいただくことが多く、非常にありがたいと思っております。これからも、無理なお願いをすることがあるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

正直なところ、経験も少なく、院長としてまだまだ足りないところが多いと自覚する毎日です。七尾市医師会の皆様には今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。





はじめまして、恵寿総合病院消化器内科医の神野正隆と申します。私は2000年に七尾高等学校を、2006年に福井大学を卒業し、初期研修修了後2008年より金沢大学旧第一内科（消化器内科）に入局しました。医局の関連病院を中心に消化器内科医として研鑽に励み、2020年4月（卒後15年目）より父のいる恵寿総合病院に戻って参りました。これからは一生七尾にいるつもりですので、今後は七尾を含めた地域医療に貢献していきたいと思っております。

七尾は自分のホームなわけですが、実は七尾に住んでいたのは高校の3年間だけで、その3年間もほぼ部活（サッカー）に明け暮れていたもので、七尾のことはあまり知らず、むしろそれまで住んでいた金沢や、大学生活やその後の医局の人事異動で福井県の病院には縁があり福井の方が正直よく知っているといった感じです。ただこれからは七尾にどっぷりとつかっていきたいので、少しずつ七尾の良さ、魅力を知っていきたいと思っています。

恵寿総合病院に赴任してからの仕事に関してですが、この1年はそれまで消化器内科を長らく支えて下さっていた瀧崎先生、宮森先生のご栄転に

伴い、それを引き継ぐ形で同時期に赴任した守護消化器内科科長と共に消化器内科医計4人態勢で24時間365日緊急処置にも対応できる体制で診療に当たっております。前任の瀧崎先生が色々な内視鏡処置具を揃えてくれたおかげで通常の上部消化管内視鏡スコープ、下部消化管内視鏡スコープはほぼすべてのスコープがその場で拡大精密観察まで行えるスコープとなっておりますし、他にも超音波内視鏡、小腸内視鏡、小腸カプセル内視鏡、内視鏡的膵胆管造影検査（ERCP）用内視鏡およびERCPの多彩な処置具、胆道鏡とラインナップは豊富です。おかげさまで先生方からは消化器疾患の患者様のご紹介をたくさんしていただいておりますし、能登北部地区はERCP等の胆道系処置ができる病院がほとんどなく、たくさん症例の紹介をして頂き、特にERCP件数は北陸地域でもかなり多い病院となっております。

しかし2020年はCOVID-19による診療制限、患者さんの受診の自粛、その影響で先生方からの紹介数の絶対数の減少等当院も例外なく、特に4～6月は病院として危機的な状況で赴任早々戸惑うことが多かったです。消化器内科もその数か月は内視鏡件数の落ち込みが激しく、その後一日にできる検査数の枠を増やし皆でフル回転で内視鏡をしておりますが、それでも2020年度は例年よりも検査数や入院患者数は減ってしまいました。2021年はbefore コロナには戻らず引き続きwith コロナでの診療になると思いますし、今後リモート（オンライン）診療も普及してくると思われます。コロナによる新常態への対応が中能登地区全体でも必要になってくると思われますので、皆様には今後一層のご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。





令和元年 10 月より公立能登総合病院整形外科に赴任しました大成一誓と申します。

まずは自己紹介とさせていただきます。私は七尾市馬出町の大成米穀店の長男として生まれました。小丸山小学校、御祓中学校、七尾高校理数科を卒業しました。その後富山医科薬科大学医学部に入学し、卒業後は金沢大学整形外科に入局しました。七尾で育ったため今回この公立能登総合病院整形外科での勤務になり、少しでも地元に貢献できるのではないかと思います。

整形外科を選んだ理由はいろいろありますが、患者さんが骨折など外傷後に手術を行うことでそのほかの専門領域と違い元気になって退院していくことや先輩方の楽しい雰囲気が選んだ理由なのではと思います。金沢大学整形外科に入局後は、済生会高岡病院、公立羽咋病院、市立砺波総合病院、恵寿総合病院と1年ごとくらいで外来診療、骨折、脊椎脊髄病、手の外科、関節外科、スポーツ整形、骨粗鬆症、関節リウマチなどさまざまな研修を積みました。その後金沢大学整形外科に戻り、腫瘍班として研究、診療を行いました。学位に関しては液体窒素処理骨における軟骨損傷をガラス化法というものを用いて防ぐことを研究しました。その後市立敦賀病院に勤

務となり、そこから骨粗鬆症、関節リウマチ、関節外科を中心に研鑽を積むようになりました。その後珠洲市総合病院の勤務となり、そこでは6年間の勤務となりました。珠洲での勤務では僻地医療の難しさ、地域医療の必要性が実感できました。骨粗鬆症加療を根付かせることで骨折患者が減少してきたことや慢性疼痛に対するアプローチなどを実臨床で研究することができました。また地域住民にとって手術治療だけでなく、外来診療の重要性を知ることができ、そして医療過疎による患者さんの転院搬送などいろいろなことを経験できたと思います。これらの経験を経て令和元年 10 月より公立能登総合病院へ赴任することとなりました。

今後進めていきたい医療は全体的に見ますと健康寿命の増進が掲げられると考えられます。そのため整形外科として運動器をあつかう専門領域としてまずは骨粗鬆症に対する医療を進めることで骨折を抑制し健康寿命の増進を進めていくことが必要と考えられます。骨粗鬆症は日本で約 1300 万人いると言われていますが実際加療されているのは 200 万人程度と言われています。また薬物治療の継続率はビスホスホネート薬において1年で 50% とも言われており、治療数及び継続率をあげていく必要があると考えられます。そのためにも能登地区での骨粗鬆症リエゾンサービスを立ち上げ、病院と医院との連携をもったり、顎骨壊死などの合併症に対し医科歯科連携を立ち上げたり、能登地区で生活されている人々に対しての公開講座などを行い、骨粗鬆症への理解を深めていただいたりしていこうと考えています。また実臨床での治療データを検討し、日本へそして世界へとこの能登地区での骨粗鬆症加療を報告できればと考えています。また腰痛、関節痛などの慢性疼痛に対して薬物治療やリハビリテーションなどの保存加療から様々な手術療法まで幅広く患者さんに提供できればと考えています。また関節リウマチに対しては JAK 阻害薬など新たな治療薬が出てきており、副作用に注意しながら新しい治療に取り組んでいく予定です。

医療は日々進歩しています。その進歩に取り残されないよう日々研鑽し、この能登地区での医療の提供に携われればと考えております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



新しい仲間 ④

浜野クリニック
石川県七尾市小島町二-50-1

牛島 聡



私は医師になって2年目（26歳）の昭和55年に七尾で約半年間過ごしました。その後縁あって平成2年に再度能登病院へ赴任しました。能登病院では中泉治雄先生はじめ多くの先生方、看護師や薬剤師、多職種の病院スタッフの皆様にお世話になりながら手術、内視鏡検査、がん化学療法、救急医療～緩和ケア、終末期医療の仕事を30年間行いました。私は「Big Surgeons（有名な外科の先生は）、Big Incisions（大きな皮膚切開をするものだよ）」と教えられて外科修練を始めた世代ですが、ここ数年は胃癌や大腸癌に対して新しく金沢大学消化管外科教授に就任された稲木先生や石川県立中央病院消化器外科部長の角谷先生、厚生連高岡病院外科部長の小竹先生、金沢大学消化管外科の森山先生にお願いして全国レベルの素晴らしい内視鏡手術を能登病院で行ってもらいました。

2回目の能登病院着任当時、鶴浦公民館に僻地出張診療へ行っていました。昭和を代表する漢方名医湯本求真先生（金沢医専第一期生）の生誕の地で、彼はそこで明治四十年に入院室を備えた医院を開業しています。3年後求真34歳の時、長女俊

子3歳が疫痢で夭折し、さらに祖母、祖父を同じ病で続いて失いました。それで求真は感奮興起して漢方の道へ進むことになったようです。彼の著書『皇漢医学』は東西医学融合の理念が貫かれています。最近の病院の診療現場でも東西医学融合の理念が活かされつつあります。消化管機能を高める大建中湯を消化器手術前後で投与します。また抗癌剤や放射線治療、免疫治療薬などで食欲不振や吐き気、しびれ、下痢、口内炎、だるさなどを認める時、その副作用対策に六君子湯、牛車腎気丸、半夏瀉心湯、補中益気湯、十全大補湯、人參養榮湯などを投与します。

COVID-19の世界的流行が未だ治まりません。あまねく世界にワクチンが行き渡り収束を迎えることを願っています。そんな中で今漢方が役立ちそうな場面は高齢者、家族が新型コロナに感染し自宅待機中の時の家族、コロナ入院患者の治療ケアにあたる医療従事者、施設で高齢のコロナ患者のお世話をする介護従事者などのハイリスクな人達の感染予防や健康維持でしょう。朝昼夕3回の正しい食事、適度な運動、十分な心身の休養が基本ですが補中益気湯（ほか十全大補湯、人參養榮湯などの補剤）を飲むことは有用であろうと思います。また、無症状あるいは軽度肺炎患者の重症化予防には葛根湯＋小柴胡湯加桔梗石膏や小青竜湯＋麻杏甘石湯（あるいは五虎湯）などが良いかもしれません。

私は令和2年3月能登病院を定年退職し4月から津向町の浜野介護医療院（時國信弘理事長）及び小丸山城址公園下小島町の浜野クリニック（飛田研二院長）にお世話になっています。自宅から徒歩通勤できる距離にあるアットホームな雰囲気職場で楽しくゆったりと仕事をしています。月曜日と火曜日が介護医療院の回診、木曜日と金曜日はクリニックで外来診療をしています。内視鏡専門医として上部消化管内視鏡検査を予約制（月～水、金）で行っています。様々な病気で、いろんな状況にある患者さんの順調な“回復”の過程をサポートすることこそ、漢方の得意とするところです。

- 1) 便秘や食欲不振が改善して少しでも“食べられるようになる”。
- 2) 不眠不安が少しでも除かれ“眠られるようになる”。
- 3) 足腰の弱りや息苦しさを少しでもくい止めて“動くことができる”。
- 4) 少しでも“心身の苦痛のない生活ができる”。

皆様には今後ともよろしくお願いします。

高齢社会と地域連携についての一考

能登中部保健福祉センター 所長 松原隆夫



令和2年度に就任して以来、コロナ禍の渦中、平時にも増して医師会の諸先生方、医療関係者の皆様には、感染症対策のみならず、能登中部保健福祉センター業務全般にわたり大変お世話になってきましたことを、本題起筆の前に、この紙面を借りて深く御礼申し上げます。

まずは、皆様におかれましては、既知の事とは存じますが、当センターの概況についてご紹介させていただきます。

七尾保健所は、戦前の昭和13年に七尾警察署の一室を借り受け発足しています。平成6年新庁舎落成とともに現在地に移転、平成9年機構改革により羽咋保健所と統合しました（現在の管轄は、七尾市、羽咋市、志賀町、中能登町、宝達志水町）。平成12年、保健所機能に福祉事業、児童相談所機能などを統合し、より機能強化した組織として当センターが誕生しました。

能登中部地区は、山や海などの自然が豊かで、伝統ある文化的な地域であり、令和元年の統計では2市3町合わせて約12万人強（石川県人口の約10分の1）の人々が暮らしています。人口増加率は、-1.75%と減少傾向にあります。年齢分布を見ると、65歳以上の高齢者人口の割合が39.0%と石川県の29.6%、全国平均 28.4%を大きく上回っています。これは、国が示した予測値を参考にすると、既に30年以上先の高齢社会の段階に達しており、この地域における僅々の対応課題にもなっています。

一般的に、年を追うごとに受療率は高くなり、さらに認知症、ロコモティブ症候群、フレイルなどを合併すると、相乗的に日常生活動作(ADL)は低下し、それに伴い健康寿命も短縮することが知られています。そのため国は、2025年を目途に、高齢者の尊厳保持と自立生活を支援するための地域に応じた包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）構築を推進しており、能登中部地区でも市町の特性を考慮した様々な取組みが計画ないしは施行されています。当センターにおいても、情報を共有しながら多方面からのサポートを行っています。今後もさらに健康と福祉に関するSDGsの一環として、事業を強化、継続することで、貢献できれば良いと考えています。

一方で、基礎疾患がなくても、高齢者は様々な苦痛（身体的、精神的、社会的など）を抱えていることが多く、地域包括ケアシステム運用に、家族を交えたACP(Advanced Care Planning)や緩和ケア的要素などを加味することも重要と考えます。緩和ケアといえば、「悪性腫瘍」「AIDS」、平成30年より「末期心不全」が診療報酬の適応疾患として承認されていますが、多くは終末期において緩和ケアチームを有する病院で行われているように思います。しかし緩和ケアは、様々な場面において早期から導入することにより、さらなる生活の質(QOL)向上が得られ、健康寿命も延伸すると言われています。今の高齢社会において、地域における概念の普及や勉強会なども今後検討していきたい分野と考えています。

このような高齢化対策には、多くの人的資源、物的資源が必要となります。しかし資源は無尽蔵に存在するわけではないため、近年「ソーシャル・キャピタル」という概念が、健康や医療の他、治安、経済、教育、自治体の活性化など、様々な分野で取り入れられるようになってきました。ソーシャル・キャピタルとは、社会関係資本と訳され、人々の協調的行動を活発にすることにより社会の効率性を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴のことを指します。医療分野の例としては、当県において、多職種による地域連携診療計画書（地域連携パス）使用や、5疾病のネットワーク事業などが行われています。

最後になりますが、やはり人は、住み慣れた地域で、安心して、自分らしい暮らしを人生最期まで続けられることが理想であり、このような地域社会の構築に、当センターが少しでもお役に立てるよう、今後も努めて参りたいと思っています。これからもご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

お元気ですか？

七尾市医師会第5代会長
円山義一先生の巻



父は大正11年(1922年)4月30日七尾市千野町生まれ。生家は農家で、牛馬や鶏などと共に育った。七尾中学(現七尾高校)へは毎日往復8kmを歩いて通った。バスケット部の主将を務め、体育のテストでフリースロー連続10本を1回で成功させた。『我が身を褒めるは一の馬鹿』を自負する父の、唯一の自慢話である。この頃の貯筋が今を支える源(フレイル予防)のように思える。

旧金沢医科大学(現金沢大学)では馬術部キャプテンを務め、名古屋の大会に障害飛越で参加した。「すべてうまく飛んで、勇んで戻ったが『失格』の旗! どうやら緊張してコースを間違えたらしい(苦笑)」。

昭和18年(1943年)医学部を卒業と同時に旭川へ。そして2か月間の軍事訓練の後、軍医として北京へ出征となった。「確か北村豊三郎先生は香港だったなあ。」「軍医は将校で馬が必要だったが、丁度乗り手の無い所謂暴れ馬が一頭空いていた。馬という動物は相手を見るのが上手で、経験の少ない乗り手だと嫌がり暴れるし、慣れた乗り手だと極めておとなしいんだ。」馴染んでいたお陰か、うまく乗りこなせた。

戦争では当然の事乍ら命の危険に晒される。父も例外ではなかった。満州で行軍中に地雷を踏み、両下肢に重症を負った。その時、仲間の軍医に「両下肢を切断しなければ死ぬぞ」と言われた。しかし「死んでもいいから切らないでくれ」と懇願し、幸いにもなんとか生き永らえた。この時の左足関節障害のため、左下肢は数cm短縮したままだ。また破片が貫通した大腿は今も病めるので、毎日のように母がマッサージをしている。

帰国後、解剖学教室助教授を勤め、昭和28年に七尾で開業した。その頃は山奥へ馬で往診に行った事もあった。バイク、そして車で城山の裏から富山の県境まで、いたるところへ往診に出掛けた。

一方、「世の中は経済ばかりが良くなってもダメ。文化も一緒じゃないと!」そんな思いからか、能登文化財保護連絡協議会会長を17年間務めた。また埋蔵文化財の調査や市文化財保護審議会会長として、能登国分寺公園の史跡整備(昭和62年~平成4年)を、更には現・県立七尾美術館の創立に率先して寄与(平成5~7年)した。

75歳を過ぎてからは文筆に精を出すようになった。それに当たっても現地を視察し、自ら写真を撮って載せた。90歳を過ぎてからも「どうしても確認した

い所がある」と、秋田県まで母を連れて車を運転して往復した事もあった。

都合12冊の本を書き上げ、出版した(後述)。ワープロを使えないので、書いては直し直しては書く手作業の繰り返しだった。それらの本を医師会やライオンズクラブ、十日会の会員各位を始め、たくさんの方々に読んでいただくのを楽しみにしていた。

思うに、自分の歴史観などを留め置きたかったのかも知れない。

発刊書籍

- | | |
|--|-----------------------|
| 2000年 4月 | ぶらり壬申の乱を歩く |
| 2000年 12月 | 鄙(ひな)が良かった家持卿 |
| 2001年 5月 | 雨乞い沢 |
| 2002年 | 土日に読む解剖生理学 |
| 2003年 | 横向きに座る大国主命 |
| 2004年 | 親鸞紀行 |
| 2006年 | 続・土日に読む解剖生理学(からだヒト百話) |
| 2008年 | 義経伝説を訪ねて |
| 2010年 | 今昔能登の道 |
| 2014年(92歳) | 月日の誌(しるし) |
| 2017年 | 奥の細道を歩く(上・下巻) |
| 結びに97歳まで折に触れ書き留めていた俳句約800句から好きな300句を選んだ。 | |
| 2019年(97歳) | 句集 落葉 |
| 日は暮れぬ 年も暮れぬ 終(つい)の家(末の句) | |

父は私たち夫婦が七尾に戻ってからは、県医師会企画の旅行などで、文化的に興味の有る所を全国隈なく訪れた。

今年の4月に父は満99歳を迎えた。

難聴が酷く、耳元で大きくゆっくり話せば聞こえるが、外出時は母が10年以上日本語の通訳(取次ぎ)を務めている。94歳になった妻とのまさに二人三脚だ。いや、2人とも杖が要るから二人五脚か!?

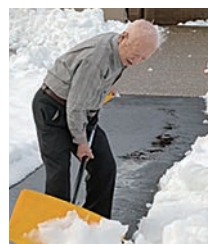
正月と5月の連休に家族全員が集合して白寿のお祝いをした。正月には東京から来た孫達(PCR検査2回して家に入れた)の為に家の前の雪透かしをしてくれた。また、囲碁の手解きをしたりして満面の笑みで家族とのひとときを楽しんだ。

この春先から、同じ話を繰り返すようになっていく。しかし、見当識障害は全くない。最近では週に何度か碁仲間との対戦を楽しんでいる。金沢へよく行きたがる(古本屋や美術館など)が、コロナ禍の渦中にあり、我慢して貰っている。

「いつの間にか100(数え年)になったなあ」

皆様、元気なうちに一度お訪ね下されば幸甚です。

(円山寛人)



新しい検査－ PET-CT 検査－

恵寿総合病院放射線科 科長 角 弘諭

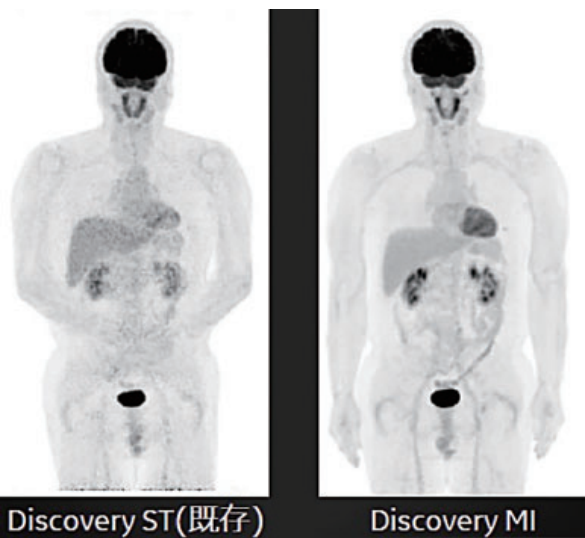
けいじゅ PET-CT・リニアックセンターは2007年1月に能登地区初となるPET-CTを導入し、能登地域の医療に貢献してきました。



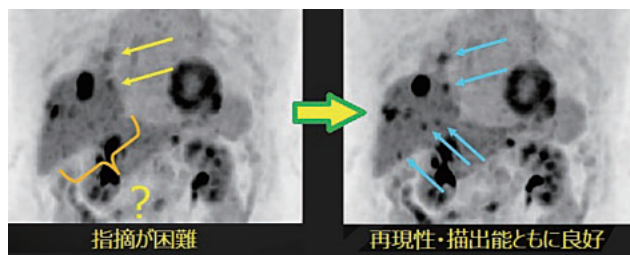
今回導入される新しいPET-CT装置についてのお話をさせていただきます。新しく導入されるPET-CT装置は、GE社製のDiscovery MI-eです。

ご存知のとおりPET-CTは、FDGと呼ばれる放射線を放出する薬剤を注射し、放出された微弱な放射線をとらえて画像化し、CT画像と重ねて一つの画像にするものです。

今回の装置は、放射線をとらえる方法がこれまでの光電子増倍管式とは異なり、半導体検出器で行います。これにより、検出の感度や分解能が向上、Q.ClearというGE独自の画像再構成法を併せる事で、肝臓や筋肉などのノイズが少なくなりすっきりと、集積がくっきりとした（定量性がよい）画像が得られます。また、高い感度により撮影時間も従来の6割程度にすることが出来ます。撮影時間短縮による患者さんの身体的負担軽減も期待できます。



これまでの装置の弱点として、PET画像とCT画像を重ね合わせた際、横隔膜付近に呼吸による



ズレが生じます。従来、患者さんとPET装置に呼吸同期用の機械をつけてズレを補正する方法が取られてきました。今回の装置では、そういったわずらわしい機械を装着せずとも、撮影中のデータを基に呼吸のタイミングを検知し、患者さんの自然な呼吸に合わせた撮影を自動で行い、ズレの少ない画像を提供します。

PETに重ね合わせるCT装置においては、ASiR-Vという画像再構成法により、ノイズ・アーチファクトの低減、分解能の向上に加え、患者被ばくも軽減させています。

PET-CT検査の最大のメリットは、一回の検査で広範囲な撮影が可能で、がんの位置を的確に把握でき、悪性度の推定も可能なことです。そのため、特にがん治療前の転移検索や、治療後の再発・転移検索などに高い有効性を発揮します。

がん治療後数年が経過し、治療した病院でのフォローが終了した方、再発を不安に感じている方などには最適の検査だと考えております。我々はそういった方々に対して、かかりつけの医院・病院や当院でエコー検査やCT検査などを一度受けていただくことをお奨めしております。それらの検査で再発が疑われる、または否定できない場合には、PET-CTによる全身検査を受けてみてはいかがでしょうか。また、明らかな再発が無くても、なんとなく不安に思っておられる方がおられれば、PET-CT健診ははいかがでしょうか。

PET-CTを始めとした、CT・MRIの共同利用は、当恵寿総合病院の地域連携課へ、健診は健康管理センターへのご連絡をお願い致します。

「ダ・ヴィンチ」～手術支援ロボット～ 導入後の今・これから

公立能登総合病院 泌尿器科部長 南 秀朗

手術支援ロボットが導入され3年

手術支援ロボットda Vinci サージカルシステムが2017年12月に導入され約3年経過しました。メディカルサロンななおの医師会の皆様のあたたかいご支援をいただき、おかげさまで2021年4月5日現在、合計126件の手術を施行致しました。

内訳は以下ようになっております。

前立腺癌→前立腺全摘除100件

7cm以下の腎癌→腎部分切除21件

腎盂尿管移行部狭窄症、尿管狭窄→腎盂形成術5件

手振れのないミリ単位の手術操作により、膜1枚の剥離切開が実現でき前立腺全摘では優れた尿禁制の回復を可能にする神経血管束の温存の手術が、腎部分切除、腎盂形成術では開放、腹腔鏡では不可能な精密な縫合が可能です。



手術支援ロボットの有用性：私は2014年に腹腔鏡技術認定医を取得、ロボットに負けない技術があればロボットは必要ないと思っておりましたが、人間は道具を作り出す動物であり、車より速く走れる人間はいなくその英知にはかないません。

未来の手術支援ロボット：国産の手術支援ロボットのhinotoriが発売されました。da Vinciの特許が切れたことにより各国から様々な手術支援ロボットが発売されることと思います。第5世代移動通信システムである5Gが導入され遠隔支援の技術も進歩し、またAIによる手術支援もいずれ可能になり、自動運転のようなロボットも登場が予想されます。

それでもda Vinciが王者たりえる理由

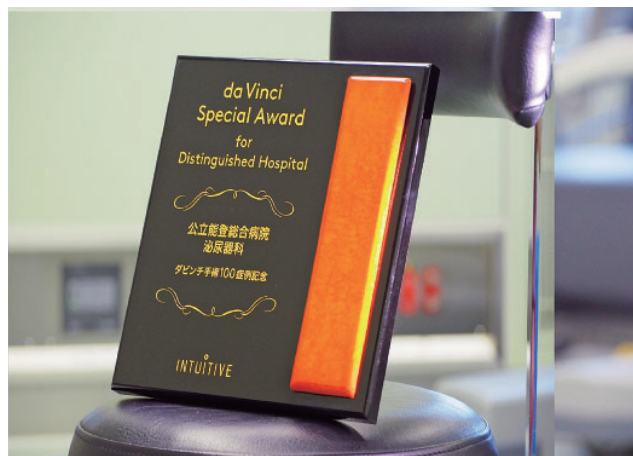
開発の歴史、world wideな圧倒的な販売台数、サービス体制から、まだまだda Vinciを超えるロボットは登場しないと思われます。

前立腺癌におけるPSA検診の重要性

米国予防医学作業部会（USPSTF）は2012年5月には「無症状の全ての健常男性に対するPSA検診は中止すべき」との勧告を出し、本邦でも、新聞等でその旨がニュースとして伝えられました。現在、USPSTFの検診反対の論拠であるPLCO研究は無作為化比較対照試験として役に立たない研究であると結論されております。米国ではUSPSTFの勧告以降、前立腺癌発生数は減少しておりますが転移性前立腺癌は増加しております。PSA検診で死亡率低下は2大RCT（スウェーデンイエテボリRCT、オーストラリアチロル地方のRCT）で証明されております。

最後に：

これからもみなさんのご支援のもと当院は頑張っていきたいと思っておりますので何卒宜しくお願い致します。



da Vinci 100 症例記念に Intuitive Surgical 社から贈呈

これだけは言わせて！— ⑪

七尾市医師会 副会長 佐原博之

Society 5.0 における医師会と with コロナの時代

「Society 5.0」をご存じでしょうか？

平成30年度～令和元年度に日本医師会の「第四次 医師会将来ビジョン委員会」に参加させていただいたのですが、横倉義武会長（当時）からいただいた諮問は「Society 5.0における医師会」でした。

「Society 5.0」は、人類の歴史における「5番目の社会」という意味です。1番目の社会すなわち Society 1.0は狩猟社会、Society 2.0は農耕社会、Society 3.0は工業社会、そして現在はSociety 4.0の情報社会と言われています。1995年のWindows 95の発売以来、パソコンはあらゆる領域で使われるようになり、インターネットが生活に欠かせないインフラになりました。2010年にiPhone4が発売されると、時代はあっという間にスマホが主流となり、日本の携帯電話はガラケー（ガラパゴス携帯）と呼ばれるようになりました。私たちは歴史的なパラダイムシフトをリアルタイムで経験したわけですが、今のこの時代がSociety 4.0です。そして、Society 5.0は、AI（Artificial Intelligence：人工知能）やIoT（Internet of Things：モノのインターネット）、ビッグデータ、5G（第5世代移動通信システム）などの革新技術をあらゆる産業や社会に取り入れることによって、社会全体が経済発展するとともに、少子高齢化・地域格差・経済格差などの社会的課題を解決し、一人ひとりが人間らしく快適に暮らすことができる未来の社会の姿とされています。

2020年2月に当県でも新型コロナウイルス感染症が確認され、4月～5月にかけての第1波で大規模なクラスターが発生し一時人口当たりの感染者数は東京をしのぐ勢いとなりました。その対策をするために県庁内に医療調整本部が置かれ、県内の主要な病院の病院長をはじめとした関係者が一堂に会して熱心な議論の末に、県内の病院間の連携体制が構築されました。7月～8月の第2波、12月～2021年2月の第3波も感染者数は増えましたが、当県は大都市圏と異なり新型コロナ陽性患者は基本的に入院で対応できたのは、医療調整本部がしっかりと機能したからです。しかし、5月に始まった第4波では、変異株の影響もあってかそれまでとは全く異なるスピードで感染が広がりました。これまでは金沢、南加賀が中心でしたが、羽咋市の介護施設や輪島市の日本航空高等学校石川で大規模なクラスターも発生し、七尾市や中能登町にも感染が広がりました。すべて

の患者を一旦入院するという対応は厳しくなり、その事態に対処するために、もう一つ宿泊療養施設を設置することとなりました。新しい施設は、県立中央病院や金沢大学附属病院に協力していただいて直接入所する方に対応することとし、従来の宿泊療養施設はこれまで通り県医師会と県看護協会が担当して、主に入院後に症状が改善した患者が入所するという役割分担をすることになりました。尚、COVID-19の患者の病院間や病院から宿泊療養施設の移動の際には「いしかわ診療情報共有ネットワーク」のEMS機能（Emergency Medical Service）が活用されています。

全国的にもまだまだ深刻な事態が続いていますが、収束のための切り札は言うまでもなくワクチンです。本号が発刊される頃には高齢者の優先接種の真っ最中だと思いますが、このフェーズを乗り切り、さらに基礎疾患がある方、そして一般住民への接種と、七尾市医師会として総力を挙げて取り組んでいく必要があります。これまで、七尾市医師会の総務会・役員会を中心に七尾市・中能登町と何度も会議を重ねて、ワクチン接種体制を整えてきましたが、それらの会議はほとんどZoomで行われました。日本医師会や県医師会、七尾市医師会の会議や研修会でもWeb（あるいはハイブリッド）が主流になり、多くの企業でテレワークが取り入れられるようになりました。オンライン診療には課題も多くまだまだ議論は必要ですが、これからの時代はあらゆる分野でICTの活用が不可欠となるでしょう。COVID-19をきっかけに、Society 5.0の扉が一気に開かれました。まだまだ当面はwithコロナの時代だと思いますが、使えるものはすべて使ってこの難局を乗り切りましょう。

「第四次 医師会将来ビジョン委員会」の答申は、下記のようにまとめました。ネットで「第四次 医師会将来ビジョン委員会」と検索していただければダウンロードできますので、ご覧いただければ幸いです。

Society 5.0において、医師会は「不易流行」の覚悟で行動すべきである。
すなわち、「不易」を貫く信念と、「流行」を受け入れる勇気を持つ、「覚悟」が必要である。



三師会ゴルフコンペ (GC)

円山寛人



まずはMSN(メディカルサロンななお)の生い立ちについて少し触れたいと思います。

昭和54年、白山榮二(第6代七尾市医師会長)先生が会員の親睦と融和協調を目的として、七尾市医師会報を創刊。それは数年後に中断されましたが、飯田桂一(第8代)先生によりMSNとして平成2年に改めて創刊されました。

当時から編集長は時の市医師会長がその任に当たっています。創刊時の編集委員は6名。真館外夫(第9代)先生、宮田浩先生、村本信吾先生、そして当時自称若手三人組の佐原吉博(第11代)・横山文男(第12代)・桜井秀明(第13代)の各先生方でした。そこに創刊以来、多大なるご指導ご協力を頂いたエッセイストの小林良子様があり、充実した楽しめる創刊号が完成しました。小林様はそれ以降のインタビュー記事の総てを担当なさって下さいました。誌面を借りて深く感謝申し上げます。

創刊にあたり「その内容はメディカル対サロンを三対七として、メディカル周辺の人的交流を目的とすべく話し合った」と第10号で飯田先生が回顧なさっています。その様な経緯を経て、市医師会の史誌として且つ医療関係各位のサロンとして今に至っています。

三人組の先生方は第11代から順次医師会長をお務め下さり、互いに尊敬し信頼し支え合いながら、三位一体のご活躍でした。さながら義兄弟のようでした。桃園で一献酌み交わし、誓いを立てたかと思うほどです。

歴代編集長の『和を以て貴しと為す』という精神の下で、沢山の趣味活動が開催されました。荒井邦夫先生のお世話によるゴルフコンペ、父・円山義一による囲碁大会、上坂英雄(第10代)先生によるボウリング大会、麻雀大会、横山文男先生によるコンサート(後にMSN合唱団に繋がる)、埴生知則先生による小旅行、そして桜井秀明先生によるめぐる会(グルメ食べ歩き)など。

ヒューマンネットワークがそれらの活動を通して広がり、そして深まった事は言うまでもありません。

さて、そろそろ本題に入ります。

MSNゴルフコンペ(GC)も医師会関係者のそのような親睦を深める活動として始められました。日本中がゴルフブームの最中の頃です。歯科医師会でもGCが活発に行われていました。それなら歯科医師会との交流も深めようとの事で、第6回GCから合同で開催するようになりました。

初回の参加者は24名で、優勝：深尾哲久先生、準優勝：石橋宏文先生、第3位：春木裕良先生と歯

科が独占。医科の成績上位者は川口光平先生、松島昭廣先生、高沢至先生でした。プレー後の懇親会では自己紹介あり笑いありで大変楽しかったようです(MSN第4号)。



さらに平成8年からは薬剤師会にも参加して頂き、春のコンペは三師会合同となりました。その初回は能登島G&CCにて開催され、優勝は坂本薬局の坂本勉さんでした。新たに薬剤師会が加わったことで、より一層盛り上がり上がっていききました。

これらの交流の深まりが医薬分業にも役立ち、後に顔の見える在宅医療多職種連携へと繋がって行きました。

GCには今年85歳になられた佐原吉博先生、82歳の荒井邦夫先生が今なおご参加下さり、私達は希望と元気を頂いています。

ゴルフは何歳までも楽しめる競技です。しかもプレイする所は芝生と緑に囲まれた別天地! 18ホールの中には様々な罠が仕掛けられてあり、いかに上手くプレイするか、さながらサバイバルゲームです。知的戦略と忍耐が求められます。また、過去を過去として切り替え『今』に集中する事も肝要です。人生リハビリといったところでしょうか!?

今年はCOVID-19の為に開催中止を余儀なくされました。早々のワクチン接種普及と共に感染拡大が収束し、心置きなくゴルフを楽しめる日が来ることを心から願っています。



2016年6月 於能登島G&CC

ななお紫蘭の会 令和2年度活動報告



ななお紫蘭の会 会長
円山病院 院長 円山寛人



七尾市在宅医療・介護連携推進協議会と協同

【急変時の連携ルール】

内容：高齢者等の救急時に必要な情報を提供し迅速な対応ができる体制を整えるため、七尾市社会福祉協議会が作成する「緊急ファイル」を活用する。

活動：七尾鹿島消防本部・中能登町・七尾市社会福祉協議会等と打ち合わせ

令和2年6月 急変時の連携ルール（第一版）を作成

【入退院支援部会】

内容：入退院支援ルールの作成、入退院時の連携シートの検討（中能登町と合同）

活動：

令和2年7月 アンケート実施

七尾市・中能登町の居宅介護支援事業所、小規模多機能型居宅介護施設を対象に「退院時に病院から提供されるサマリーの内容」について

令和2年8月24日 入退院支援部会分科会

①入退院支援ルール案の作成

②アンケート結果を受け、ケアマネジャーへの情報提供の方法について検討

令和2年12月16日 有床医療機関連携担当者打合せ会(1)

有床医療機関の退院支援担当者に集まってもらい、入退院支援ルールの確認と退院時に必要な情報の周知

令和3年3月17日 有床医療機関連携担当者打合せ会(2)

各医療機関における協議結果について検討

【ほっとけんステーション推進部会】

内容：ほっとけんステーションの拡充及び普及啓発ならびにフォローアップ講座について検討

活動：

令和2年8月31日 ほっとけんステーション推進分科会

①認知症サポート医が所属する医療機関を新たにステーションとして追加登録する

②チェックシートを作成し、ステーションの業務に資するようにする

令和2年12月 「認知症の気づきのチェックシート」を作成

令和3年2月1日 七尾市中能登町の調剤薬局・歯科医院に加え8医療機関をステーションに追加（合計40カ所）

【8医療機関】 ・円山病院 ・さはらファミリークリニック
・北村病院 ・七尾松原病院 ・宙メンタルクリニック
・浜野クリニック ・山崎医院 ・辻口医院

【在宅看取りの普及啓発】

内容：在宅における看取り推進のために、看取りの現状についてのアンケートを実施

活動：

令和2年10月 七尾市内の在宅看取りを実施している訪問看護事業所を対象にアンケートを実施

アンケート結果を今後の在宅看取りに活かす

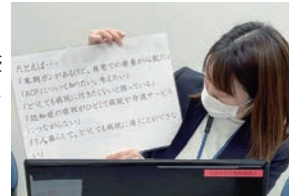
【勉強会の開催】

内容：医療介護福祉従事者が垣根を超えた連携についてオンラインによる勉強会を行う

活動：

令和3年3月6日 オンライン研修会の実施（テーマ：8050世帯に出会ったら、あなたなら、どうする？）

約70名が参加



【在宅医療・介護情報の周知】

内容：市民が在宅医療・介護の情報を得やすいよう、情報を集約し周知する

活動：

令和2年5月～ 各機関へホームページ掲載の協力依頼と掲載内容について確認

令和2年11月 医療機関、歯科診療所、薬局、居宅介護支援事業所、小規模多機能型居宅介護施設の一覧を七尾市在宅医療・介護連携支援センターのホームページに掲載

（七尾市社会福祉協議会のホームページ内）

あじさい会

（中能登町在宅医療介護連携を考える会）



あじさい会 会長
安田医院 院長 安田紀久雄



コロナ禍の中、20年目を迎えた今年度のあじさい会はリモートで始まりました。

今年も「年をとっても、病気になっても、介護が必要になっても、ひとりになっても、中能登町にいたいわいね～」の思いを支える会を目指して、在宅療養に関わるいろいろな職種と一緒に勉強会をしました。本当は、みんなで顔を合わせて、みんなで語り合い、みんなで深め合い、みんなでワイワイ学びたい私にとって、リモート越しでは寂しいなと思っていましたが、今まで顔を合わせていたメンバーと画面で会えると、やはり嬉しいものです。まあ、本当は直接会いたいのですが……。毎年かかさずやって

いた年2回の懇親会もやりたいのですが……。でも、ここは新しい生活様式で、新しい研修様式で、新しい懇親会形式で、ということで、初回の研修会は「Zoomの使い方を学ぼう！」にしました。会えない中でもやっぱり顔の見える関係、思いの見える関係は大切ですね。画面を通してですが、みんなで同じテーマで語り合う。ありがたいですね。いつものような回数はできませんでしたが、あじさい会で作成した「人生会議の紙芝居」の披露や「コロナ禍での看取りの支援」「新型コロナの最新情報」など、療養生活で大切なこと、時代に合った支援のことを学びました。

来年度は、中能登町の出前講座に「人生会議」の講座を入れてもらい、行政と共にあじさい会メンバーみんなで、「人生会議をしようね」という普及啓発をしていきたいと思っています。

「在宅生活を支えるあじさい会」であるために、3密を避けつつ、連携を密にしながら、地道な活動をしていきたいと思っています。頑張るぞ～。リモート懇親会もやるぞ～。

（文、石坂美紀）



七尾看護専門学校から



令和3年度入学式

希望を胸に、新たな一歩

令和3年4月8日 入学式が行われました。
新入生 37 名が、これから始まる学校生活への期待に
心を弾ませました。



学校長式辞

目標を忘れず見逃さ
ず迷わずまっすぐ歩
んでください。



入学生代表宣誓

自分の理想の看護師
像に少しでも近づけ
るよう、努力してい
くことをここに誓い
ます。



歓迎の挨拶

自分の目指す看護師
になるために私たち
と共に学習に励んで
いきましょう。

職員紹介



令和2年度行事



11月26日

◇戴帽式

19期生が病院実習を前に
決意を新たにしました。



3月5日
◇卒業証書授与式

3学年全員で「旅立ちの日
に」を合唱し、卒業生の門
出を祝福しました。



令和4年度
看護学生募集

オープンキャンパス
2021



高校1・2・3年生 社会人の方

7/31(土)・8/1(日)

七尾看護専門学校
TEL: 0767-52-9988
FAX: 0767-53-6548

☆校内見学・個別相談
☆看護技術体験
☆在校生との座談会



本校公式
SNS
更新中

Instagram



twitter



facebook



医 師 会 の 窓

〔行事〕	令和2年5月～令和3年4月
総務会	令和2年5月1日・6月8日・7月20日・9月7日・10月12日・11月9日・12月14日 令和3年1月12日・2月8日・3月8日・3月22日・4月12日・4月26日
役員会	令和2年5月11日・6月15日・7月27日・9月14日・10月19日・11月16日・12月21日 令和3年1月25日・2月15日・3月15日・4月19日

令和2年	
5月18日	社内監査
25日	第8回定時総会
6月8日	MSN編集担当者会議
7日	三師会ゴルフコンペ（優勝：深尾哲久／深尾歯科医院）
8月24日	「新型コロナウイルス感染症に係る行政検査」実施に関する七尾市医師会懇談会
9月29日	救急医療講習会
30日	MSN編集会議
10月2日	石川県医師会との懇談会
22日	PPE（個人防護具）着脱に関する研修会
25日	秋のゴルフコンペ（優勝：荒井邦夫／荒井皮ふ科クリニック）
27日	七尾看護専門学校運営会議
28日	インフルエンザ流行期における発熱患者への対応等に係る七尾市医師会懇談会
11月26日	七尾看護専門学校戴帽式
27日	第2回能登中部小児休日診療協議会
令和3年	
1月27日	令和2年度緊急時医療研修会
29日	MSN編集会議
2月19日	新型コロナワクチンの高齢者接種に係る意見交換会
3月5日	七尾看護専門学校卒業式
29日	令和2年度臨時総会
4月8日	七尾看護専門学校入学式

〔医師の異動〕 令和2年4月～令和3年3月（順不同、敬称略）	
入会：	飛騨賢一（七尾松原病院）、阿部健作・有馬佑・碓井愛・神野正隆・久野貴広・清水陽・守護晴彦・田中美喜歩・貫井友貴・野口昌寛・野村和利・藤原秀・藤原優太・村田亜香里・安田幸矢・安田由衣・磯野真子・伊藤綾香・佐藤美並・西村健太・春田侑亮・宗平悠暉・寺林博之・尾山量子・野村俊一（以上、恵寿総合病院）、大成一誓（公立能登総合病院）
退会：	山崎省行（ご逝去、元 やまざきクリニック）大島俊哉（介護老人保健施設和光苑）、田中美喜歩・碓井愛・安田幸矢・東恭子・岩淵佑・西村真子（以上、恵寿総合病院）
異動：	時国信弘・由利健久（浜野西病院→浜野介護医療院）、牛島聡（公立能登総合病院→浜野クリニック）、安井正英（国立病院機構七尾病院 院長に就任）、泉谷麻子（恵寿総合病院→自宅）、辻本有瑛→小坪有瑛（公立能登総合病院、氏名変更）、村本信吾（公立能登総合病院→自宅会員）

副会長の
コーナー

「光明が差すその日まで」

七尾市医師会 副会長 藤田晋宏



スペインかぜが1918年に大流行したとき、当時の世界人口（18億人～20億人と推定）の約3分の1が感染し、そのうち5000万人～1億人が亡くなったと言われています。スペインかぜは3年で終息しました。

今回の新型コロナウイルス感染症が初めてメディアで報道されてから1年半経とうとしています。

経済は大打撃を被り、自由な移動が制限され、生活様式も変わりました。幸い、人類の英知の結集により、ワクチンが開発され、今年5月から私たちの地域でもワクチン接種が本格的に開始され、明るい未来を展望できるようになりました。あと1、2年もすれば少なくともこの疫病に関しては憂

いがなくなりそうです。

振り返ったときに、これほど行政の担当部署の方々と、われわれ医師会が長時間議論し合い、計画を練り、一つのことを実行したことはかつてなかったと思われます。事を進める上で大事な原則は一致ですね。そのことを改めて学んでいます。その一方で、行政の担当者の皆さまが家庭とのバランスを犠牲にして貴重な時間を捧げてくださっていることに心より感謝を申し上げます。さぞかしお疲れになっていることと存じます。さて諸先生方、個別接種も始まり、日々の仕事により一層忙しさを増していることと思います。しかし、へこたれる訳にはいきません。地域住民の命と健康を守るという大義に、明るく前向きに乗り切って行きたいものです。医療者、行政、地域住民が共に頑張り、その先に光明が差す日まで耐え忍びましょう。

短 信

◆令和2年度石川県医師会医療功労者表彰

佐原まゆみ（さはらファミリークリニック）

◆令和2年度石川県知事表彰（健康増進事業）

中村耕一郎（中村ペインクリニック）

飛田 研二（浜野クリニック）

◆令和2年度石川県学校保健会会長表彰

高澤 雅至（国立病院機構七尾病院）

◆令和2年度厚生労働大臣表彰（全日本病院協会60周年）

神野 正博（恵寿総合病院）

◆令和3年度第44回石川テレビ賞

神野 正博（恵寿総合病院）

◆令和2年度七尾市・中能登町在宅当番医制事業報告

○休日当番医実施日数：72日

○来院患者数

七尾市・中能登町（一般）：504人

七尾市・中能登町（広域小児）：478人



編 集 後 記

新型コロナウイルス感染症発生の最初の報告から1年半経過しました。今回の記事では最大関心事の新型コロナ関連が多いです。医師会として感染対策、感染者の医療、そして予防接種と切れめなく遂行していかなければなりません。そのために地域や行政との連携も必要です。連携は大変ですが関係各所の皆さんが一体となって協力し、お互いがその協力に感謝し奮闘している様子が記事から伝わってきます。今は緊急事態ですから迅速にことを遂行していくことはもちろん大切です。ただワクチン接種ひとつ見てもワクチン管理・接種ミス等の事故が起きているのも事実です。医療では取り返しのつかない事故が起きることもあります。ただ突っ走るだけでなく時には立ち止まって周りを眺め、自分の立ち位置を俯瞰することも大切だと感じています。今はワクチン打たなきゃ。

（田中文夫）

（発行責任者）奥村義治

メディカルサロン **なな**お編集部

（編集委員）五十音順

上木 修・円山 寛人・鍛冶 武和・鎌田 徹

北村 勝・木元 一仁・佐原 博之・高澤 雅至

田中 文夫・中尾 義広・中村耕一郎・藤田 晋宏

安田紀久雄・山本ひろみ・神前昭太郎

【会員訃報】

元 やまざきクリニック／山崎省行先生（七尾市つつじが浜）が令和2年7月11日にご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

発行 七尾市医師会

〒926-0854 七尾市なぎの浦156

TEL (0767) 52-2297 FAX (0767) 53-6548